慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	若きパルクの"第一の"自殺
Sub Title	La première tentative de suicide de "La Jeune Parque"
Author	高橋, 俊幸(Takahashi, Toshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2000
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.31 (2000.) ,p.48- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20000000-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

若きパルクの“第一の”自殺

髙　橋　俊　幸

全512行のアレクサンドランからなるポール・ヴァレリー『若きパルク』の重要なテーマの一つが“死”であることについては、今日異論を差し挟む余地はないように思われる。最初の注釈者である哲学者アランは、この詩における死のテーマを奇妙なほど過小評価したが[1]、詩篇を虚心坦懐に読めば、パルクが自死を希求し、しかもそれを成し遂げなかったことが、いろんな表現で示されているのに否応なく気づかされる。

その最も明確な例は、304-5行目の〈“Terre trouble... et mêlée à l'algue, porte-moi/Porte doucemont moi”——海藻の入り交じった溷濁の地よ、我を運べ〉である。海辺に立つパルクが、溺死を希求するさまが、そこにははっきりと示されている。

更に、一般に“影の発見”と題される144行目〈“La terre où je fuyais cette légère mort.”——私が軽い死を逃れたこの大地〉の前後、165行目〈“A ce goût de périr”——この滅びへの嗜好〉を含む20行ほどのフラグメント、“春”のフラグメント直前の219行目〈“O mort, respire enfin cette esclave de roi”——死よ、この女奴隷を吸い込んでしまえ〉の前後10行ほど、更には370行目〈“Je soutenais l'éclat de la mort toute pure”——かつて私は、純粋な死を支えていた〉の前後20行、そして381行目〈“O n'aurait-il fallu, folle, que j'accomplisse”——ああ私は、成就すべきであったのだろうか〉からはじまるフラグメントなどは、いずれもその解釈は一筋縄では行かないものの、自死への誘惑とその挫折、成し遂げなかった死への愛惜などをテーマとしている。更にF. de Lussyの草稿研究[2]や、Nicole Celeyrette-Pietriの論文[3]などによって、制作段階においても死が常に重要なテーマで

あったことは、今日立証されている。

ところでここで問題になるのは、この詩篇の中のクロノロジーの問題である。354-5行目でパルクは海へ身を投げようとするわけであるが、自死の挫折を表すと思われる表現は、前述したように、詩篇の中でそれより前にも現れる。144行目の前後や165行目の前後など、完全に回想と思われるシーンでも、“死”とその不首尾が歌われているのである。

『若きパルク』研究史において特徴的なことは、詩篇の中の時間的流れを再構成して、出来事が起こった順に並べかえようという試みが、さまざまな注釈者たちから、執拗になされていることであり、たとえばJacques Duchesne-Guillemin は、“若きパルクのクロノロジー的なキャンバス”と題して、この問題だけにその著書の一章を充てているし[4]、Hytier も Walzel もそれぞれ持論を展開しているわけであるが[5]、この詩篇が注釈者にそうした試みを要求するのは、私見によれば“死”が詩篇の中に拡散していること、回想される自死の試みが、一体何を指しているのか明確とは言えないことに原因があると思われる。

以上のことを念頭に置いて、パリの国立図書館に所蔵されている三巻本の『若きパルク』草稿（以下JPmsと略す）を閲覧していたところ、第５段階[6]に属する紙片の中に、次のような一節があることに気づいた。

Ou bien barque funèbre ! Et moi, vive, debout, [148]
[...]
Je soutenais l'éclat de la mort toute pure [370]
Telle j'avais jadis le soleil soutenu ! [371]
Toute, mais toute à moi, je m'offrais mon sein nu ; {32} {372}
Et si d'un fer fortuit j'eusse senti la pointe
A la pressante main ma main se serait jointe
Fière de le conduire et de substituer
Ma clairvoyance au dieu qui ne sait pas tuer.
Que dans le ciel placés mes yeux tracent mon temple ! [209]

(JPms Ⅰ, 45)

([ ] 内の数字は決定稿の行数を、{ } 内の数字は、まだ詩句が決定稿の形を取っていないが、それと認められることを示す)

372行目と209行目にはさまれた四行の詩句に注目しよう。決定稿では、削除されてしまった4行である。

もし偶然の鉄の切尖を切迫した腕に感じたならば
私の腕はそれに重ね合わされて、
誇らしげにそれを導き、
殺すことの出来ない神の代わりに自らの炯眼を置きかえるだろう

鉄(=fer)が、古典悲劇などでは自動的に剣(=épée)の意味に使われたことを考えるならば、詩句の意味は明白であろう。つまりこれまで不当に無視されて来たこの四行のヴァリアントの中には、はっきりとパルクの自殺未遂、しかも海辺での溺死よりも、ずっと荒々しい手段による自殺が書き込まれていたのである。

クロノロジー的に、当然海辺での自殺未遂よりも前にあるこの剣による自刃の試みを、我々はパルクの“第一の自殺未遂”と呼ぶことにしよう[7]。第5段階(この段階では、詩篇のタイトルは“La Seule Parque”—『独りのパルク』だった)で、この“第一の自殺未遂”は、若干の語句の修正を受けながら、三度書き直しされている(JPms Ⅰ, 45, 48, 58)。

そして続く第6段階では次のような形を取る。

Oui, si d'un fer fortuit j'eusse senti la pointe
A la pressante main ma main se serait jointe
Forte de le conduire et de substituer
Ma violence au dieu qui ne sait pas tuer.

(JPms Ⅰ, 69)

ここでは、四行目の“clairvoyance”が“violence”に代わり、さらに意味が明確になっている。

殺すことのできない神の代わりに、私自身の暴力を置きかえるだろう

死を祈願しても、希うだけでは死ぬことはできない。パルクは、自分の手で“剣を導き”、それに“誇らしげに”決着をつけようとするのである。

この四行のヴァリアントは、その後詩篇から除外され、さまざまな問題を後に残すことになるのだが、それについては後述することにして、この“第一の自殺未遂”を念頭に入れることで可能になる、幾つかの解釈上の発見について述べることにしよう。

例えば406行目〈“Non, non!... N'irrite plus cette réminiscence!”—この遠い記憶を掻き立てることはやめよ！〉の“réminiscence”について、オクターブ・ナダルはこれを既に失われてしまった原初的な自己同一性の記憶と解し[8]、ワルツェルをはじめとする多くの注釈者は、前夜の、海辺での溺死未遂の記憶だと解しているが[9]、筆者はこれを（決定稿では暗示されるだけの）遠い過去に遡る第一の自殺未遂をも含む、これまでのパルクの全過去を回顧する詩句として読まれるべきだと考える（その方が、“réminiscence”という言葉の意味にもよく合致すると思われる）。さらに423-4行目〈“Cherche, du moins, dis-toi, par quelle sourde suite/La nuit, d'entre les morts, au jour t'a reconduite?”—せめて捜せ、どんな秘密の道を通り、夜がお前を陽の下へ連れ戻したのか？〉も、それまでのパルクが想念した、全ての死への衝動とその挫折を歌ったものとして読まれるべきであろう。479-80行目〈“Et ce reste d'amour que se gardait le corps/Corrompirent sa perte et ses mortels accords.”—この躰が抱いた愛の名残りが、滅びと死すべき契約を破綻させたのだ〉も同様である。これらの大団円近くの語句は、全詩篇を一瞬のうちにフラッシュバックさせるような重層性を帯びているのである。

しかし、この“第一の自殺未遂”によって、最も明確に決着がつけられる

と思われる解釈上の難点は、“O n'aurait-il fallu, folle” のフラグメントの中に置かれた次の四行である

Trouveras-tu jamais plus transparente mort
Ni de pente plus pure où je rampe à ma perte
Que sur ce long regard de victime entr'ouverte,
Pâle, qui se résigne et saigne sans regret ?

お前はもはや、透明な死を見出せないだろう
私が破滅に向かって這う、より純粋な傾斜も
半ば引き裂かれ、青ざめ、惜しげもなく血を流す
生贄の長い視線の下よりも

この四行（384-7行目）は、これまで、注釈者たちの意見を最も分かれさせて来た四行であると言える。それは、海辺で溺死するのを思い止まって戻って来たパルクが、何故ここで半開きの生贄〈“victime entr'ouverte”〉に自らを譬え、血を流す〈“saigner sans regret”〉のか、理解しがたいからである。

たとえば教科書版を編纂した H. Fabureau は、次のような解釈を提出する。

ここでパルクは、静脈を開くストア派の自殺を思い浮かべる[10]。

Benoit と Walzel もこれと同じ意見を採っている。しかし Maurice Bémol と Francis Pruner は、これをパルクの生理と解する。

パルクが自らの蛇を忘れた瞬間に、突然起こる生理の描写である[11]。

確かに静脈を開く死というのは、384行目の “transparente mort” を説明

するのには都合がいい。血を失って蒼白になることで、「透明な死」に到るというわけである[12]。

だがこの「透明な死」は、そのような肌の濃淡のような表層的な意味だろうか。書簡の教えることろによると、草稿を読んだピエール・ルイスがこの表現について注文をつけ、それに対してヴァレリー自身は次のように返答している。

“透明な死”、この表現には私は固執します。この形容詞はその前のくだり、そして詩篇全体の精神とつながっているのです[13]。

“透明な”という形容詞が単に死者の肌の色という意味なら、“詩篇全体の精神とつながる”という詩人の発言の意味を理解することは困難になる。むしろこれは、Walzel が言うように、「完璧な死、純粋で、一切の卑俗なところのない死」[14] と解釈するべきであろう。

ましてやベモル、プリュネ両氏の「生理」という解釈は、出血の現象を説明はするが、何故それが「透明な死」と結びつくのか、それは一切説明されない。

結論から言うと、少なくとも草稿の段階においては、この傷、この血は、剣による自殺未遂による想像上の傷であり、出血であったと思われる。

やはり第五段階の草稿を引こう。

Le moment souverain ne la peut plus pâlir. [392]
Que boive le soleil ce flot qu'elle dédaigne,
Que le jour en ruine orne ce flanc qui saigne
Mais que bus par la soif de ces cupides yeux
S'assombrisse le sable et s'effacent les cieux,
Versant d'un col qui penche une sombre fontaine {393}

(JPms Ⅰ, 63)

392行と393行の間に挟まれた四行の詩句は、はっきりと、パルクの傷の場所まで示している。

最初の二行が特に重要である。

彼女が軽蔑するこの波を、太陽が呑み込まんことを。
そして廃墟を照らす太陽が、この血を流す脇腹を飾らんことを。

前述した通り、草稿の第5段階には、海辺での自殺の詩句はなく、代わりに剣による自殺未遂を回想するくだり（“O n'aurait-il fallu”）が結尾部を飾っていた。この順序で詩句を読むならば、その末尾近くに置かれたこの数行を、剣による想像上の傷を歌ったものと考えることは、極めて自然と思われる。

この四行のヴァリアントは、“第一の自殺未遂”が詩句から抹消されたあとも、何度も推敲を重ねられ、詩篇が決定稿の形を取るぎりぎりの時期まで、抹消されずに存続している。

たとえば第12段階では、次のような形を取る。

Et le pas étouffé du dieu qu'elle dédaigne
Se perd, plus il approche une gorge qui saigne
Elle ne trouve plus dans l'oubli spacieux
Ces fantômes volants qui furent terre et cieux

（JPms II, 49）

彼女が軽蔑する神の、音のない足音は
失われ、続いて血を流す喉が近づく。

さきほど引いたヴァリアントの中に、“殺すことのできない神”という表現があったことを想起しよう。殺してくれない神を“軽蔑”したパルクには、その神の足音は失われ、その代わりに置きかえた自分自身の暴力を想起する。

そしてここでは、その傷痕の箇所は脇腹ではなく、より自殺を示すのに劇的な形である喉に変わっている（“gorge” は女性の胸の意味もあるが、いずれにしても、より劇的になることは言うまでもない）。

つまりヴァレリーは、剣による自殺の詩句を抹消したが、その結果としての傷と血の方は、なおもしばらくの間残しておいた。だが最終的には、あまり具体的に傷の場所を示すことは、好ましくないと判断したのであろう、その傷の詩句も最後には抹消し、決定稿では、ただ出血の現象を表す詩句だけが残されたのである。「私は詩句は少し穏やかにしなければなりませんでした」という、詩人がモッケル宛に書いた手紙の一節が思い出される[15]。

ここでは384-7行目だけに考察の対象を絞ったが、それだけでなく、この詩篇には、傷あるいは傷痕を明示あるいは暗示する詩句が非常に多い。目につくままに挙げるだけで、48行目の “ma lourde plaie”、98行目の “cette morsure fine”、172行目の “mon marbre béant”、298行目の “ma jeune blessure”、299行目の “Mais blessures, sanglots, sombres essaie” などがあるが、このうち蛇の噛み跡であることが明白な98行目以外は、その解釈は解釈者によってまちまちである。ここでは紙面の関係で詳細する余裕がないが、遠い過去の剣による自殺未遂は、これらの表現にも何らかの影響を与えていると考えられる。

草稿を調べて最終的にわかったのは、次のことである。

草稿の全13段階のうち、第1段階から第4段階までは、ヴァレリーは海辺での溺死〈“Terre trouble... et mêlée à l'algue”〉で詩を終わらせようとしていた。そしてこの段階ではそれは未遂ではなく、本当に主人公（まだこの段階では、主人公に名前はなかった）を死なせて終わらせる予定だったらしい。土の上に残る主人公の足跡で、その死を暗示して終わるという方向もあったようである[16]。

ところが第5、第6段階では、詩篇の中間部に剣による自殺未遂（“第一の自殺未遂”）を導入して、その代わり最終的には主人公を生かす方向へと

変わった。

その証拠にこの二つの段階では、今まで結尾部を飾っていた “Terre trouble...” のフラグメントが姿を消して、末尾に来るのは “O n'aurait-il fallu” の節である。つまりこの段階では、パルクは死なず、海辺にも行かない。かつての剣による自死と、その挫折を嘆くエレジー（これより少し前の状態の時、詩篇は “élégie intérieure” と呼ばれていた）の様相を呈していたのである。

しかし第7、第8段階では、ヴァレリーは再び考えを改め、パルクを自殺させることにしたのである。そして “Terre trouble...” の詩句を結尾部として復活させたため、第一の自殺未遂の方は、縮小を余儀無くさせられた。最後にヒロインを自殺させることにするならば、それ以前の自殺の試みについて多弁を弄することは、詩篇をあまりにも暗いものにするだけでなく、ラストの死の劇的効果を薄めてしまうだろう。

そして第9段階以降、ヴァレリーは三たび考え方を変え、決定稿の形に到達する。つまり、“Terre trouble...” の詩句を、詩篇の末尾ではなく真ん中に据えることにしたのである。自殺の詩句を、最後ではなく真ん中に据えるということは、それを未遂に終わらせることにしたということである。そしてラストを生の讃歌で詩篇をしめくくることにした。

そしてこれによって、“第一の自殺未遂” の方は完全に行き場を失うことになる。

はっきりと剣で我が身を刺す詩句は、この時期すでに詩篇から除外されていたが、その前後に置かれていた詩句（“影の発見” の詩句、“純粋な死” の詩句、それとパルクが自らを葬る祭壇を想い描く209-10行目など）も明示を避け、詩篇中に分散することになった。パルクを最後に生かす方向に決まった以上は、一つの詩篇の中で自殺未遂が二回も描かれるのは、形式においても内容においても厳密を重んじるヴァレリーが許すことではなかっただろう。

これによって決定稿では、海辺での溺死未遂の他にも、何か過去において死の試みがあったらしいのだが、それが何だかはっきり特定できないということになってしまった。それによって、さまざまなクロノロジー研究なども

生まれたわけであるが、時には詩篇中の全ての死に向かう試みを、この海辺での事件に結び付けて考えるような、極端な解釈を生むことになったのである。

転用された詩句もある。“O n'aurait-il fallu” のフラグメントは、第5、第6段階では、剣による自死を回想して詩篇をしめくくる役割を果たしていたが、決定稿では、ほぼそのままの形で溺死未遂の後に置かれて、海辺での死の挫折を歌うものになった。ただしこの箇所も、その直前の事件だけを歌ったものと解釈すると、この詩句の持つ重層性は見失われてしまうだろう。

これら全てがヴァレリーの意図するところでもあったかどうかはわからない。だがとにかく死は、詩篇の中にばらまかれて遍在することによって、詩句の解釈を難解なものにしたが、同時に詩篇末尾のパルクの生への回帰を、より感動的なものにしているのである。

注

[JPms I, II, III] Dossier de La Jeune Parque relié en trois volumes, conservé au Département des Manuscrits de la Bibliothèque Nationale (les chiffres arabes renvoient aux feuillets)

1. アランは148行目（“Glisse! Barque funèbre...”）につけた注で、こう書いている。「これがこの詩篇における死の領域であり、それはとても小さい」（Paul Valéry ; *La Jeune Parque commentée par ALAIN* Gallimard, 1953, p. 80）
2. F. de Lussy ; *La genèse de La Jeune Parque* Minard 1975
3. Nicole Cereyrette-Pietri ; *La Parque et la mort*, in *Paul Valéry* 2, Minard, 1977
4. *Etude pour un Paul Valéry* La Baconnière, 1964 pp. 225-237
5. Jean Hytier ; *Question de Littéraire, études valéryenne et autres* Genève, Droz, 1967

   Pierre-Olivier Walzel ; *La Poésie de Paul Valéry* Cailler, 1953
6. 草稿の段階づけは、国立図書館司書でもあるフローランス・デュ・リュシーの分類に従った（前掲書）。たとえば第五段階（La Seule Parque）は、オクターブ・ナダルの分類では第三段階、ブリュース・プラットの分類では第八段階に当たる。
7. 筆者は十年ほど前の仏文論文（*“Les mortels accords inachevés de La*

Jeune Parque" 藝文研究第59号　1991年）の中で、このパルクの第一の自殺未遂について触れた。その後明治学院大学の清水徹先生が、草稿におけるパルクの自殺未遂を明確に指摘したはじめてのものとして拙論を取り上げて下さった（「『若きパルク』を読む」明治学院論叢第580号　1996年）。研究から離れていた筆者がこの言葉に勇気づけられたことを、この場を借りて感謝したい。

8. Octave Nadal ; La Jeune Parque, présentation et études
   Le Club de Meilleur Livre, 1957, p. 80
9. Walzel 前掲書　p. 221
10. *Poésie choisies,* Hachette, Edition scolaire, 1952, p. 29
11. Francis Pruner, *La Symbolique du Serpent dans La Jeune Parque* in *Mélanges Littéraires François Germain*, université de Dijon 1979 p. 240
12. たとえばGrace Campbell はこう述べている。「この表現は、生命が去ったあとの、死者の肌の透明さを表すものである」*La synphore dans La Jeune Parque de Paul Valéry*, University Mississipi, Romance Monographe, 1975, p. 18
13. *Œuvres Complètes* I, p. 1625
14. Walzel 前掲書　pp. 220-221
15. *Œuvres Complètes* I, p. 1630
16. たとえば次のようなヴァリアント
    noyade,
    Pied sur le sable（JPms II-25）
    ne laisser que le vertige, l'empreinte du pied（JPms II, 32）